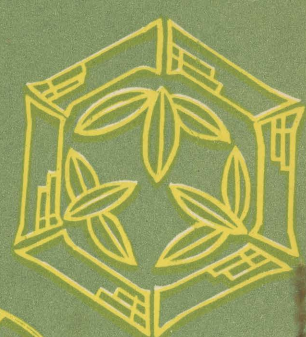




人秋採霜稿
 吉
 霜月類考
 興行



四心稿

交樂齋

乍憚口上

野山の紅葉も霜に驕りてよろしき季節と相成申候處御客様には愈々御機嫌麗はしく被遊候段奉賀候
 俅而當座に於ては吉例によつて霜月顔よせ興行と仕り一座惣顔ぞろひの上にて當座秘藏の古典狂言より目下の新體制に應ずべく國民精神の根ざすところ尤も有意義なるものを選抜いたし健全なる慰樂のうち明日の活動に備ふるやう特に心懸け一座太夫三味線人形連中に於ては當座傳統の技巧と熱意を傾けて車輪に相勤め可申尙又此度は當座桐竹門造儀初代より四代目までの門造追善の爲め故人を偲びて懸命に相勤め申候間之れ又宜敷御聲援を賜はり度當興行久しぶりの出し物揃ひに御座候間何卒お見落しなく相變らず御引立の程偏に奉御願申上候

昭和十五年十一月一日

四ツ橋

文樂座 敬白

昭和十五年十一月一日初日

初日午後二時開演
 毎日午後三時開演

・御觀覽料・

- 一等席 御一名 金三圓三十錢
(一階座席三十錢上り)
- 二等席 御一名 金一圓三十錢
- 三等席 御一名 金六 十 錢
(各等入場税別)

一等御座席)は五日前より
 一等椅子席)

前賣切符發賣致居候

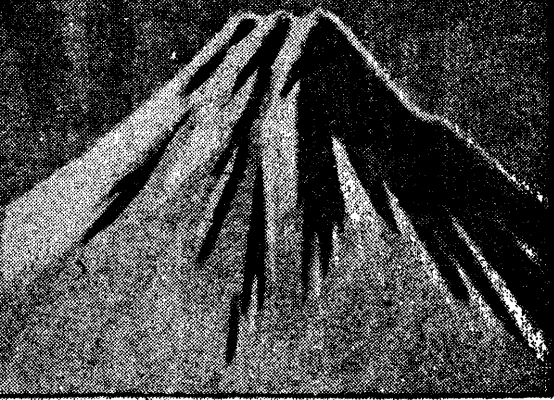
前賣切符 南⑤四七壹番
 專用電話 南⑤三〇三二番
 一般御用 南⑤三七八番
 の電話

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ますから御便利で御座ります。

★ 家の兵の亞興れ護 ★



國民精神總動員

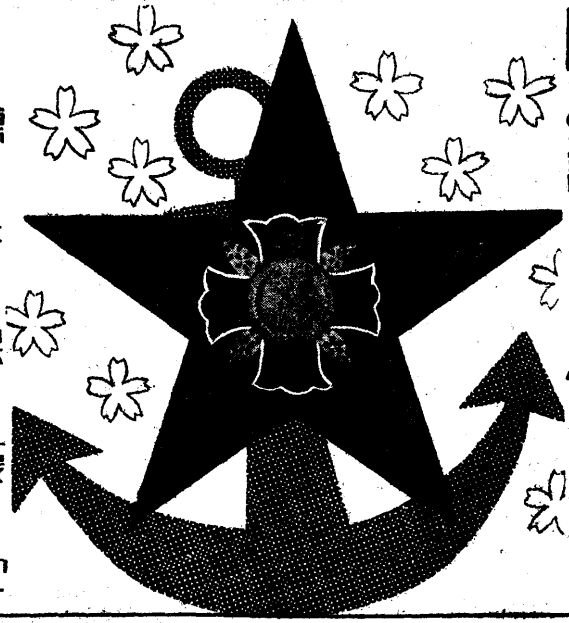


盡忠報國

舉國一致

堅忍持久

國を護つた
傷兵護れ



國民精神總動員中央聯盟
傷兵保護院

高霜月顔よ興行

十一月初一日 初日

初日 午後二時開演
 毎日 午後三時開演

太夫・三味線・人形總出演

源平布引瀧

竹生鳥遊覽の段より
 瀬尾十郎詮議の段
 齋藤實盛物語の段
 綿線馬山の段
 音羽殿松並琵琶の段
 紅鳥葉山の段

開幕 三時〇分
 閉幕 三時二十分
 幕間 五分
 三時廿五分
 五時十五分
 十五分
 五時三十分
 七時十五分
 十五分
 七時五十分
 七時二十分
 十五分

戀女房染分手綱

道中双六の段
 重の井子別の段

七時三十五分
 八時〇分
 八時五十分
 十分

お駒 戀娘昔八丈

鈴ヶ森の段

九時〇分
 九時四十分
 打出し

文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來
舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたの

も當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはすうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くぐつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方か

ら漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は

永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音楽上の大成を試み、作者近松門左衛門を得て、戯曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば義太夫節に限るやうになつたのであつたこれは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と人形の動作とがピッタリと合

致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、暑ッ苦しくなるから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と人知とが費された一個の人を三人が、りで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道滿大内鑑」(葛の葉の狂言)からといふことになつてゐる。今日から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形(略してツメ)と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實

盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せて動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむつかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

(斯くして數十年の藝道修業をまつて

始めて一人前になるのです—編者—)

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつ

た。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しまつた程度であるが、それ以前のは、三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲操り式のは、もつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたからの名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使

はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。それが次第に「出語り出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雑

な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

（月刊「文化日本」八月號所載）
河竹繁俊氏稿より抜粹



情



竹生島遊覽の段 實盛 (竹本文字太夫)

小まん (竹本南太夫)

左衛門 (竹本伊勢太夫)

忠太 (竹本駒若太夫)

宗盛 (竹本松島太夫)

鶴澤 (豊新左衛門)

源平布引瀧

竹生島遊覽の段
瀨尾十郎詮議の段
齋藤實盛物語の段
綿繰馬の段
音羽山の段
鳥羽御殿松並琵琶の段
紅葉山の段

解題

「源平布引瀧」全五段、寛延二年(二四〇九)十一月竹本座上演。作者は並木千柳(宗助・宗輔)三好松洛の合作。材を「平家物語」「源平盛衰記」中の清盛專横の事、義賢義平に討たる事、義仲出生の事、多田藏人行綱の事、關の小萬の事、清盛等平家一門布引に遊びし事、實盛が白髪を黒に染め赤地錦の直垂、萌黄威の鎧で出陣し手塚太郎金刺光盛に討たれた事からとつて趣向を立てたもので角書きに「待宵侍從優美藏人」とある。全體の

瀬尾十郎詮議の段

中

次

齋藤實盛物語の段

綿繰馬の段

音羽山の段

鳥羽御殿松並琵琶の段

紅葉山の段

野竹	鶴竹	豊竹	豊竹	野竹	鶴竹	豊竹	豊竹	野竹	鶴竹	豊竹	鶴竹	豊竹
澤本	澤本	澤本	澤本	澤本	澤本	澤本	澤本	澤本	澤本	澤本	澤本	澤本
八津	寛治	廣太	大隅	仙呂	吉生	相生	和泉	新左	仙呂	吉生	相生	廣隅
の子	治郎	太夫	太夫	太夫	五郎	五郎	太夫	太夫	太夫	太夫	太夫	太夫
造	郎	助	助	助	郎	郎	夫	夫	夫	郎	郎	郎

略筋は多田藏人行綱布引瀧に平重盛を射損じて放浪し、近江の百姓九郎助の掣となり養女小萬と契る。後折平と稱へて木曾義賢の奴となり其女待宵に思はれる。義賢清盛に壓迫され自刃するや藏人は其室葵御前を九郎助に托して駒王丸を生ます。駒王を召捕りに來た平家の侍齋藤實盛の述懐と瀬尾十郎が小萬の實父たるの告白の場はその三段目の切に當る。「實盛物語の段」或ひは「綿繰馬の段」續いて原作では行綱が三人上戸の一人藤作となつて鳥羽御殿へ入り込むと、妻の待宵も官女となつて入り込み我が君を救ひ參らせんとするといふ場面であるが、この四段目は今日に見る様に改作増補されて、行綱は松並檢校となつて入込み三人上戸の中、怒り上戸を平家の侍難波六郎とし待宵の代りに娘小櫻を出してその折檻から松並の見顯しになると云ふ筋立てに變へられ、「松並檢校琵琶の段」と呼ばれる様になつてゐる。

人形役割

梗概

竹生島遊覽の段

琵琶湖、竹生島に遊んだ平宗盛の一行が勢田唐

宗盛 公 吉田文二郎

崎邊りへかゝつた船上だつた。矢橋の方から廿才

齋藤實盛 吉田玉藏

餘りの女が口に白絹を啞へて、拔手を切つて泳いで

飛彈左衛門 吉田玉市

來た。そして其の船に助けられた。救はれたのが

小ま 桐竹紋十郎

平家の船とも知らず。それは、平家方に追はれて

追手 忠太 桐竹紋昇

ゐる源氏方の女、小萬だつた。

瀬尾十郎詮議の段

折柄、御供として同船にあつた齋藤實盛は、女

九郎助の女房 桐竹紋太郎

が持つ白絹が源氏の白旗だと見てとるや、矢庭に

矢橋仁惣太 吉田玉徳

大刀を抜き放つて女の腕を切り落した。白旗を堅

百姓九郎助 桐竹政龜

く掴んだ片腕と、その死骸は其のまゝ何處かへ流

伴太郎 吉田文枝

れ去つた――。

葵御前 吉田光之助

こゝは琵琶湖近くの百姓九郎助の家である。九

齋藤實盛 吉田玉藏

郎助は木曾義賢の妻葵御前を我家へ匿つてゐたが

瀬尾十郎 吉田榮三

其日、孫の太郎吉に誘はれて網打ちに行き、白絹

小ま 桐竹紋十郎

持つた女の片腕が掛つたので持つて來た。誰れが

庄屋 吉田兵次

もがふとしても離れなかつたその白絹が、太郎吉

百屋 大ぜい

もがふとしても離れなかつたその白絹が、太郎吉

齋藤實盛物語の段

葵	御	前	吉	田	光	之	助
齋	藤	實	盛	吉	田	玉	藏
百	姓	九	郎	助	桐	竹	政
九	郎	助	の	女	房	桐	竹
俣	太	郎	吉	吉	田	文	枝
駒	若	君	桐	竹	紋	之	助
綿繰馬の段							
齋	藤	實	盛	吉	田	玉	藏
百	姓	九	郎	助	桐	竹	政
九	郎	助	の	女	房	桐	竹
俣	太	郎	吉	吉	田	文	枝
葵	御	前	吉	田	光	之	助
駒	若	君	桐	竹	紋	之	助
矢	橋	仁	惣	太	吉	田	玉
松	並	檢	校	吉	田	玉	幸

の手に難なく離れた、よく見れば源氏の白旗ではないか。葵御前始め皆々驚くばかりであつた。其時、九郎助の甥矢走の仁惣太の訴人により、平家の侍瀬尾十郎、齋藤實盛の兩人が、源氏にゆかりの者は胎内まで探せと云ふ清盛の命令だと出産の日を待つ葵御前を召捕りに来る。九郎助の妻小よしは、先刻の腕を葵御前が産み落したと持つて出る。實盛は支那の故事を引いて腕を産まぬものでもないと瀬尾十郎をなだめて葵御前を救ふ。實盛はもと源氏の侍だつたのである。瀬尾は思ふ所あるのか澁々戸外に出て藪蔭へ身を忍ばせた。

實盛はその女の片腕を見て思ひ當つた。そして竹生島詣の折、船中より腕を切つて白旗を水に沈めた仔細を涙乍らに物語つた。太郎吉は突然母の仇と實盛を睨む。其處へ村人が小萬の死骸を昇いで來た。實盛が片腕を胴に接ぐと不思議や小まんは息吹き返へし太郎吉を抱いた。そして其まゝ全く絶命した。九郎助は、小まんは實は拾ひ子であ

谷川冷水 吉田多三郎
 多田藏人行綱 吉田榮三
 難波六郎 桐竹門造

鳥羽御殿松並琵琶の段

松並檢校實へ多田藏人行綱 吉田榮三
 仕丁平次實へ難波六郎 桐竹門造
 仕丁藤作實へ上總五郎 吉田文五郎
 仕丁又五郎實へ越中次郎 桐竹紋十郎
 娘小櫻 桐竹紋司
 紅葉の局 吉田兵次
 紅葉の局 吉田兵次
 若葉の局 吉田万次郎

紅葉山の段

平重盛卿 吉田文作
 多田藏人行綱 吉田榮三
 難波六郎 桐竹門造
 上總五郎 吉田文五郎
 越中次郎 桐竹紋十郎

つたと告白した。折も折、葵御前は男子を生み落した。實盛は名付親となつて駒若丸と呼ばせた。九郎助は孫の太郎吉を駒若丸の家臣にと望んだが葵御前は何か一つの功を立てねばと云つた。その時瀬尾十郎が躍り出て、故意と太郎吉の手にかゝる。そして自分こそ小萬の父親である事を明して孫の太郎吉の出世の爲めと死んでゆく。

太郎吉は平家の大将を打取つたと云ふ手柄で家臣に取立てられた。實盛は綿繰馬に打ち跨つた太郎吉に向ひ、やがて母の仇として討たれよう、場所は北國篠原、それを楽しみに成人せよと云ふ。太郎吉は勇み立つた。

斯くて木曾家の血統も實盛の情によつて一脈を保ち、駒若丸は後に木曾義仲となり、太郎吉は木曾義仲の四天王、手塚太郎光盛となつて、齋藤別當實盛の墨染の首を討ち取る……。

鳥羽御殿へ參内せんとした盲目の琵琶法師松並



檢校は、音羽山で怪盜谷川冷水の爲めに騙し討ち
 に會つた。それを物蔭から見てゐた源氏の武氏多
 田藏人行綱は直ぐさま谷川冷水を殺して檢校の仇
 を討つ。檢校は奇しくも源氏の流れをくむ者で、
 盲目ながらも行綱と同じく清盛を討取らうとその
 機會を待つてゐたのだ。そして今宵その好機に恵
 れたと思つたのがこんな事に終つたのだ。

斯くて行綱は自ら俄盲目の琵琶法師松並檢校に
 なりすまして鳥羽御殿へ忍び込むことになる。併
 し平家の武士難波六郎はさつきからこの様子を見
 てゐた……。

鳥羽御殿に君を慰め様との重盛の計ひで、今宵
 松並檢校は召されて來た。それは多田藏人行綱が
 姿だつた。しばし一間に待つ折柄、小櫻が案内に
 來た。小櫻こそ行綱の娘で、兼ねて妻の待宵と共
 に宮仕への女に仕立て、御殿に入り込ませてゐた
 のだつた。行綱は娘の口から、妻待宵が清盛を刺

將、難波、上總、越中の面々であつた。

鳥羽御殿は忽ち修羅の巷と一轉した。

行綱一人の奮闘もこゝでは遂に空しかつた。

難波、上總、越中を隨へた平重盛の溫い情けに一旦この場を外して他日戰場で見えんことを約束するより途のない多田藏人行綱であつた。

そして、布引瀧の邊りで、重盛に弓を射かけて仕損じた往年を思ひ起すのだつた。

眞赤に燃える紅葉山は、平家の旗よりも赤かつた。

さうとしてならず、敵手にかゝつた事を聞き無念の涙を流す。其時人の足音に、悟られじと小櫻に手を引かれ奥殿さして行く。折しも秋も末、仕丁三人庭前に紅葉を焚いて酒あたゝめて酌み交はし果ては怒り笑ひ泣きの三人上戸の大騒ぎ。その中の一人平次は酌に來た小櫻を捕へ、多田藏人行綱の娘か白狀せよと、果ては木にくゝりつけての折檻。丁度御殿を下つて來た行綱はこの様子を見て援けようとするが悟られてはと我慢する。仕丁どもは愈々厳しく折檻をし、その上行綱に琵琶を所望する。行綱は仕方なく一曲を彈ずる。平次はまたまた小櫻を責めつける。併し小櫻は健氣にも目前父の行綱を控へ乍ら決して白狀しない。父はさすがに悲歎の思ひに沈む。その油斷を見ました平次、箒に仕込んだ刀を以つて行綱に切り付ける——行綱は平次を蹴倒し、小櫻を脇に抱いて奥庭へ駆け込む……

三人の仕丁、平次、又五郎、藤作こそ平家の武



持花

平家物語 卷六

紅葉

(前略) 去ぬる承安の比ほひ、御在位の始つかた、御年十歳許にも成せ給けん、餘に紅葉を愛させ給て、北の陣に小山を築せ、楯紅葉の、色うつくしう紅葉したるを植させて、紅葉山と名附て、終日に叡覽有に、猶飽足せ給はず。然を或夜野分はしたなう吹て、紅葉を皆吹散し、落葉頗狼籍なり。殿守の伴の造、朝ぎよめすとて、是を悉く掃捨てり。残れる枝、

散れる木葉をば掻聚て、風寒じかりける明方なれば、縫殿の陣にて、酒煖てたべける薪にこそしてんげれ。奉行藏人、行幸より先にと、急ぎ行て見るに、跡形なし。「如何に。」と問へば、「しかん。」と云ふ。藏人大きに驚き、「あな淺まし。君のさしも執し思召しつる紅葉を加様にしける淺ましさよ。不知、汝等、只今禁獄流罪に及び、我身も如何なる逆鱗にか預らんずらん。」と、歎く處に、主上いとゞしく夜のおとゞを出させ給ひも敢へず、彼へ行幸成て、紅葉を叡覽なるに、無りければ、「如何に。」と御尋有に、藏人可奏方はなし。有の儘に奏聞す。天氣殊に御心好げに打笑せ給て、「林間煖酒焼紅葉と云ふ詩の心をば、其等には誰が教へけるぞや。優うも仕りける物哉。」とて、却て叡感に預し上は、敢て勅勘無りけり。(後略)

(註) 松並琵琶の段、三人上戸の件りは、右に掲げた平家物語の一節を骨子として取入れたもので、この「源平布

引瀧」はこの他「平家物語」及び「源平盛衰記」中の有名な挿話傳説を巧みに換骨脱胎して全段の趣向を立

てゝゐる。尙この引用は山田孝雄校訂本に據つた。

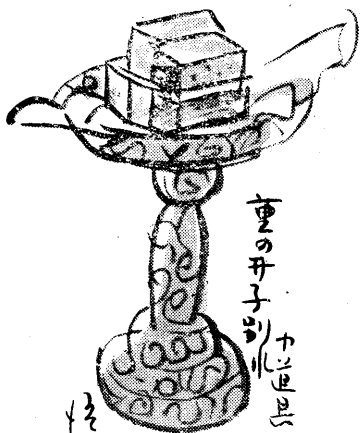
戀女房染分手綱

道中双六の段
重の井子別れの段

解題

本曲は寶曆元年二月（二四一一）大阪竹本座上演。作者は吉田冠子、三好松洛の合作。全篇は、東山の段、涼みの段、與作勘當の段、重の井訴訟の段、道成寺の段、孝行の段（杵掛村）、恩愛の段、道行、親里の段、道中双六、重の井子別れの段、旅籠屋の段、歸參の段、敵討の段の全十三段からなり、この中、重の井子別れの段は、その第十段目に當るので、俗に「戀十」と云はれ、また「三吉愁の段」とも呼ばれてゐて、淨瑠璃に、又歌舞伎に度々上演され、人口に膾炙された一段である。

この「戀女房染分手綱」の原作は寶永五年（一七三六）大阪竹本座上演の、大近松作「待夜小室



道中双六の段

豊竹駒太夫
竹本雛太夫

鶴澤清二郎

鶴澤清三郎

重の井子別れの段

豊竹古靱太夫

鶴澤清六

人形役割

道中双六の段

乳母重の井 吉田文五郎

調 姫 桐竹紋之助

本田彌三左衛門 吉田玉幸

腰元お福 吉田光之助

おどり子 桐竹門次

おどり子 吉田玉枝

馬方三吉 吉田榮三郎

重の井子別れの段

乳母重の井 吉田文五郎

馬方三吉 吉田榮三郎

本田彌三左衛門 吉田玉幸

調 姫 桐竹紋之助

腰元お福 吉田光之助

宰 領 吉田玉市

宰 領 吉田玉徳

節」(後「丹波與作」と改題)で、これを改作し
場敷を多くし、筋を複雑にし、舞臺上の技巧を豊
富にし、お家物式に仕立直したものである。

因みに作者吉田冠子とは、人形遣ひの非常な名
手初代吉田文三郎の作者名で、新作淨瑠璃の趣向
人形や舞臺の工夫など彼の獨創から數多のものが
生れ、現在の人形芝居の基礎は彼により作られて
そのまゝ今日まで傳來してゐる。(「義經千本櫻」
の源九郎狐の人形衣裳に源氏車の模様を付けて今
でもその衣裳のまゝを踏襲してゐるのもこの文
三郎である。)謂はゞ、人形三人遣ひの大成者と
も、且つ人形芝居の基礎を築上げた人とも云へ、
現在の人形遣ひが姓とする「吉田」の流祖でもあ
る。斯の道の歴史の上に重要な位置を占める人
である。

梗概

丹波の城主由留木家の息女調姫は、關東の高家
入間へ養子嫁子として江戸へ下る約束が出来た。



入間家からは奥家老本田彌三左衛門が迎へに來て用意萬端整ひ、いざ出立と云ふことになつた。

所が未だ年齢は僅か十歳になつたばかりの姫君は、この東下りが嫌だと俄に云ひ出してむづかるので、お乳人重の井はじめ腰元たちは、手をつくして慰めたけれど、どうしても御機嫌が直らないので一同困りはてゝしまつた。

そこへ、丁度姫君と同じ年頃の馬子の三吉と云ふものが、東海道道中双六とやらを弄んで居ると云ふことが聞えるので呼び寄せて姫君の御機嫌をとらせやうと云ふことになつた。

三吉は御前近くの縁先へ來て、望まれるまゝに道中双六の繪解きを、ことば面白く囃したて、東國の珍らしい物語をするのですつかり姫君のお氣に入り、直ぐにも東へ下ると云ふことになつた。

さて、かうして頑はない姫君が東へ下ると御意あつたのは何と云つても、馬方三吉の手柄である

お乳人重の井は、その褒美にと御前から下され物の菓子や、なにがしの錢を三吉に與へた。

すると突然、三吉は「由留木殿のお乳人重の井さまとはお前が、そんならおれが母様」となつかし氣に抱き附かうとするのだ。重の井は、この小さな馬方がわが子とは、まさかと驚くのだつたが、しかし、胸に覺えないことではないのだつた。

話は十年のむかしに溯らなければならない。

この由留木家の家老伊達與三兵衛の倅に與作と云ふものがあつた。重の井は能師竹村定之進の娘で、腰元として御殿奉公をして居る中、與作と何時か離れがたない仲になり、その間に與之助と云ふ男の子さへもうけたのであつた。

この不義のことが顯れ、悪者の讒言によつて與作は故國を追放され、馬方にまで零落してしまつた。重の井は父親の定之進の申譯の切腹により、與作と別れ、その後再び歸參して、姫君のお乳人

となつたのだ。

今此處に馬方三吉から、母様とすがりつかれ、その身の上を聞かされ、證據の守り袋まで見せられてみると、三吉はまさに我が子の與之助に疑ひはなかつた。

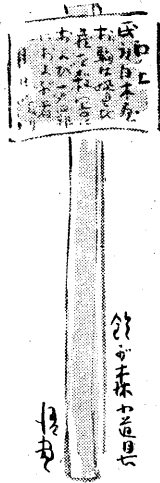
三吉は現在父親の與作とも別れ、幼ない身で近江の石部に馬方奉公をして居るのだ。その望みと云ふのは、父親を尋ね出し、親子三人水入らずで一日でも暮したいと云ふのだつた。これを聞いた重の井は胸もくだけるばかり、現在我が子に馬追ひをさせ、おのれはお乳人よと衣裳を着飾つて居る心苦しさ、しかし今の場合母子と名乗つては、姫君のお名にも障ること、たゞ氣も亂れてむせび泣くのであつた。

見るからに賢し氣な三吉に、人違ひと偽つても無駄なことは知れて居た。譯をよく話せば、と今までの物語を三吉に詳しくして聞かせ、心を鬼にして今では母でも子でもないもの、とそのまま別

れやうとするのだつた。三吉も聞き分けて立ち上つたが、その見すばらしげな後影に又こみ上げて来る悲しさは、世が世ならば千三百石の世取りのこの子、雨風雪降りの夜道に馬追ふ姿も偲ばれ、我が身を投げ伏して奉公の身の淺ましさを打歎いたのであつた。

時に奥口から、姫君の御立ちが知らされ、乗物も昇き寄せられた。

そして三吉が姫君のお伽にと、泣く泣く唄ふ、「坂は照るく」の馬子唄に、涙を嚙んではかない親子の別れをしたのであつた。



鈴ヶ森の段

人形役割

竹鶴 鶴澤 伊達 友部 太夫
本澤 友部 伊達 友部 太夫
本澤 友部 伊達 友部 太夫
本澤 友部 伊達 友部 太夫

娘 親 庄 親 親 娘
お 庄 兵 衛 兵 衛
駒 衛 女 房 衛 駒
鈴 鈴 鈴 鈴 鈴 鈴
ヶ ヶ ヶ ヶ ヶ ヶ
森 森 森 森 森 森
の の の の の の
段 段 段 段 段 段

桐 桐 桐 桐 桐 桐
竹 竹 竹 竹 竹 竹
紋 門 小 文 太 太
十 兵 文 太 太 太
郎 吉 作 郎 郎 郎 郎

大 吉 吉 吉 吉 吉 桐 吉 吉 桐 桐
田 田 田 田 田 竹 田 田 竹 竹
万 多 文 紋 太 太 太 太 太
次 兵 三 二 太 太 太 太 太
郎 米 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎 郎

見 奴 奴 番 番 番 番 才 代 庄 親 娘
物 平 角 太 太 八 三 官 兵 親 娘
人 内 内 太 太 八 三 官 兵 親 娘

解題

お三駒 戀娘 昔八丈

鈴ヶ森の段

安永四年九月(二四三五)、江戸の薩摩外記座初演。作者は松貫四、吉田角丸の合作。全曲は曲輪の段、道行夢路の二つの雁、屋敷の段、祭の段、城木屋の段、評議の段、鈴ヶ森の段からなり、その中城木屋(白木屋)と鈴ヶ森が有名である。

この劇曲の材題となつた實説は、初演の年より四十八年前の享保十二年(二三八七)大岡越前守の裁断で鈴ヶ森に死罪となつた白子屋お熊の事件で、江戸新材木町二丁目の材木商白子屋庄三郎の娘お熊は、又四郎と云ふ養子を迎へたが、手代の忠八と姦通し、夫の又四郎を殺さうとして未遂に終り、お熊は斯くして市中を引き廻はされ鈴ヶ森の露となつた。このお熊の引き廻しの衣裳は、上



に黄八丈の大格子、下着は白無垢、髪は島田に結ひ上げ、薄化粧さへ施した廿三才の女盛り、手には水晶の珠數をかけて馬上に荒繩でくゞられて行く光景の凄艶さ、群衆は、先廻りしては二度も三度もこの美しい科人の姿を嗜虐的な眼で眺め入つた——。それは「鈴が森」の段に美しく描出されてゐる。

この實説から「戀娘昔八丈」は生れ、歌舞伎に入つて翌安永五年三月、中村座で上演され、書替狂言（髮結新三）も出来るに至つた。

尙白木屋の「ソリヤ聞えませぬ才三さん」のさわりが大流行し、「闇の夜にお駒とお駒行き當り」の川柳もよまれた次第である。

尙、松貫四は、「戀娘昔八丈」の他「伽羅先代萩」の作者として有名で、別に玉泉堂とも號して福内鬼外（平賀源内）との合作「神靈矢口渡」他の作品がある。この松貫四は萬屋吉右衛門と云ふ市村座の茶屋の主人で、この萬屋は古くから續い

た家で、代々當主は吉右衛門を名乗つた。この萬屋の娘が故人中村歌六と夫婦になつて生れたのが今の俳優吉右衛門で、藝名を付ける時に母方の祖父の吉右衛門の名を貰つたわけである。つまり中村吉右衛門の先代は萬屋吉右衛門で、その先代から何代か昔の萬屋吉右衛門がこの松貫四なのである。血のつながりは論外として、とにかく松貫四は吉右衛門の先祖であると云ふ事が、最近伊原青々園博士によつて發見されたのである。

梗概

白木屋の娘お駒は評判の器量よし。髮結の才三とは人目を忍ぶ戀仲である。白木屋も家運が傾いて金に縛られて喜藏といふ鯉を取らねばならぬ事となつた。親達はお駒に因果を含め、末は野となれ山となれ、才三と駈落しても構はぬからとにかく祝言さへ濟ませばとほのめかした。才三はもとは侍で、家寶の茶入詮議の爲め髮結と身をやつし

て居るのであるが、その茶入は喜藏の手にあるのでお駒の手で奪つて呉れと頼む。番頭丈八はお駒にきつい横戀慕、お駒に勤めていつそ嫌な喜藏に毒藥を盛つて自分と一所になれと毒藥を調達してくる。お駒は才三と添ひ遂げたいばかりに、丈八の云ふまゝに喜藏に毒を盛つて、夫殺しの罪を犯す。と云ふ白木屋の段に引き續いて、この鈴が森の仕置場所の緊張した舞臺となる。

今日は夫殺しの大罪人白木屋お駒が、お仕置きになると云ふので大勢の見物衆が青竹の矢來の外へ集つて騒いでゐる。

お駒の母も、目を病む父の庄兵衛も、娘の最後を見届けようと雑踏する見物衆の中に混じつてゐた。

群衆の騒ぎの中を、馬にくゝられてしほ／＼とお駒が引かれて来る。人々はある美しい首が果敢なくも切り落されるのかと惜しみ合ふ。

群衆の中に父母の姿をみたお駒。今は泣いても

悔んでも詮方ないことであつた。たゞ、我が身の不運を泣き、不孝を詫び、そして死にゝ行く身に戀人才三の未來を祈るお駒だつた。

やがて時刻移つてあはやお駒の首が刎ねられ様とする時だつた。髮結才三、實は尾花才三郎が番頭丈八を引きくゝつて驅け付けた。手にはお駒の赦免狀があつた。

喜藏こそ茶入の盜賊であることが丈八の口から判明し、お駒は殺し得で赦免となり、茶入は目出度く才三郎の手に戻る。

お駒、才三の前途は明るかつた……………。

◇「壺坂」初演年代に就いて◇

當座十月興行の本番附「壺坂」の解題中にその初演年代を石割松太郎氏の説に従つて明治十六年と誌しましたが、木谷蓬吟氏の研究によれば明らかに明治十二年の誤りで、石割氏も後年それに従はれた由、木谷氏から御注意を戴きました。こゝに改めて訂正致します。尙この種諸賢の御教示を今後とも御願ひ申します。

文 樂 の 人 形

ポール・クロードル

活きた俳優

はどんなに天稟があつてもその演ずる想像の劇に無理な要素、

何かしら實際の日常のあるものを交へるのでいつも我々の氣分を邪魔する。俳優は畢竟假想に止まるのである。これに反して人形は所作から取入れるものゝほかには生命も、動作もないのである。それは物語につれて生きる、恰度人の影がよみがへつて自分のやつたことをすつかり物語り、さうしてそれが追憶から次第に現實となるのである。俳優が語るのではなく

言葉が動作

をする。人物が靈感の化身となつてゐる。事と物語との間のは

つきりしない境に泳いでゐる。観客は見台を前に太夫が語るすべてを、その人物に見ることができさうして太夫は三味線の連引きと掛聲との力

を借りるが、三味線は押へつけた神経の震動を加へ、掛聲は何ともいへぬ咽喉を絞る音聲によつて場面の感動を表はすばかりでなく、假想の人物の生存慾と更生の努力をはつきりさせるのである。

人形は幽霊

のやうなものだ。脚を地につけてゐない。人もこれに觸れない

し人形も觸れやうとはしない。その全生命全動作は心から起るのである。覆面または素面で後にある人形遣ひの不思議な氣合から起るのである。この雙方の配劑から起るのである。つまり人形はその表現である現實が極めて巧に離脱してゐるために歴史が少しも不純な分子を借りることなく、全く想像と冥想との中に展開してゐる。さう見れば別な行方ではあるが淨瑠璃は能と同じ目的に到達するのである。

と思やる、さつきにはしほり首も討
りよかと思ふたに、火入らずを下さ
るゝとは此又五郎有難ふてゝ涙が
こぼれる。

イヤ外でもない大内に奉公はすれど
終に其琵琶とやらを聞た事がない、
何と爰でちよつと弾て聞さんせぬか
ム、サア、それは弾れまいゝ是ば
かりは機嫌らしう弾れぬ筈じやテ、
へ、ソレ琵琶は女堀氏の作にして
廉承武より日の本に傳る十二の律管
に五音をわかち、内心に愁有ば、音
律に現はるゝ四筋の糸の善悪邪正ヤ
うかつにはイヤサ弾れまい、おれも
望かけたからは琵琶がならずば、ヲ
、いつそ爰へおりて此小櫻の詮議
して下んせぬか、ハレやくたいも
ない琵琶はまだしも手馴し業、胴慾

なげに其詮議が、どふなるもの、サ
アそんなら一曲聞してくれるか、サ
アそれは、但し詮議してくれるか、
ム、ウその儀は、琵琶をひくか、詮
議をする、サアゝゝゝ御坊か
返事はマ何じやいのと否と言さぬ詞
の鏡、打付けに望一物松並が、胸に
連立騒ぐ、琵琶の湖水のてうし口亂
るゝ心しらせまじ、悟られまじと是
非なくも手に取上る琵琶の音の、し
らべもしどろ恩愛の血筋四筋の糸筋
に、いざや諷はん是とても浮世は夢
の現とやさは有ど恩愛の中心とゞま
つて、臍を斷魂をうごかさずといふ
事なし。

道中双六の段

これゝ御らんせうたしやんせ、是
こそ五十三次を居ながらあゆむ膝

粟毛馬は、いししい道中すご六なむ諸
佛ふんしんと書いた六字を六角のさ
いは櫻木花のみやこをまん中に思ひ
ゝの印を置いてさらばこちから打
出の濱大津へ三里爰でやばせの船賃
が出舟召せゝたび人の乗おくれじ
とゞき草津お姫様より先づ姥が餅一
ト口ニタ口みな口どぢやう踊りこゑ
坂へこすのもさい次第さいをふれ振
るゝやすゞかを後にさがればまけ
まいとせきにせきより龜山にたばこ
火うち石やくしおつとくは名の舟
渡し所々の名物かふておあしつく
ゝ突手まり子にひいふう三いよふ
府中杖尻にすつとんとんゝんと打つ
たる沖津波松原晴るゝ膏藥かふて月
をすひ出せきよみ寺由井蒲原や吉原
の花の蒲燒名物の鰻の肌へ沼津の宿
三嶋こゆれば箱根へ三里さいめしだ

い關こゆる悪いめうでは手はんを取
に元の京へ立歸るがつてんかヲ、の
みこんだ小田原うみらふ大磯平塚藤
澤のさはともなしに双六のさいさき
もよし門出よし道中早めてとつかは
といそぐ程が谷神奈川越え川崎を越
え品川こへまつ先がけのお姫様一ば
んがちに勝つ色の花のお江戸につき
賜ふ一のうらは双六の幸有り悦び有
りなぐさみ有ける道中とどつと興に
ぞ入賜ふ。

重の井子別れの段

いかなる因果な生れ性、現在我子に
馬追させ、男の行衛も知らぬ身が、
母は衣裳を着飾つて、お乳の人よお
局よと、玉の輿に乗つたとて、是が
何になることと聲を忍びて泣くばか
り、子は生れつき賢くて、聞きわけ

ある程猶泣入り悲しい話を聞きまし
た。さりながら常に乳母が申したは
乳兄弟の事なれば、母様にさへ逢ふ
たらば、父様も出世なさるゝ由、御
訴訟なされてくだされかしと、いへ
ばちやつと口をおさへ。アレ／＼勿
體ない、其乳兄弟は言はぬ事、姫
君様の關東の養子嫁子にお下り、高
いもひくいも姫ごぜは大事の物先は
他人の世間體、三吉といふ馬追が、
乳兄弟に有るなどゝ、どう妨げにな
らうやら蟻の穴から堤も崩る、軽い
やうでも重い事ひそ／＼いふて人も
聞く、先づ早う出てくれと、泣く／＼
いへば三吉。ア、母様あんまり遠
慮過ぎました、先づ言ふて見て下さ
れ、また言をるか聞分ない、夫の事
我子の事母に如才があるものか、合
點のわるい聞分けないと制する中に

奥よりお乳の人、どこにぞ御前か
ら召しますと呼ばれば、アレ聞き
や、人がぐる出てたもと手を取つて
引出だす不憫や三吉しく／＼涙頬冠
りして目をかくし、杳見まつて腰
につけ、見すばらしげな後影コリヤ
ま一度こちらむきや、山川で怪我し
やんな雨風雪ふり夜道には腹が痛い
と作病おこし、二日も三日も休んで
煩らはぬ様にしてたも、毒な物くは
ずに腹癩疹の用心しや、可愛の形や
いた／＼しや、千三百石の代取が、
何の罰ぞ咎めぞと、式臺の段階子に
身を投げ伏して歎きしが懐中の有合
ふ一步十三、巾紗に包み是嗜みに持
つて居やと、涙ながらに渡さるゝ。
三吉見かへり恨しげに母でも子でも
ないならば病うと死なうと要らぬお
構ひ其一步もいらぬ馬方こそすれ伊

達の興作が惣領じや母でもない、他人に金貰ふ筈がないエ、胴慾な母様覺えて居さつしやれと、わつと泣き出す其有様、母は魂消えいりて、養君、お家の御恩思はずばさて一人子を手放して何のやらうぞ、奉公の身の淺ましやと、もだえ焦れて歎きける。

鈴が森の段

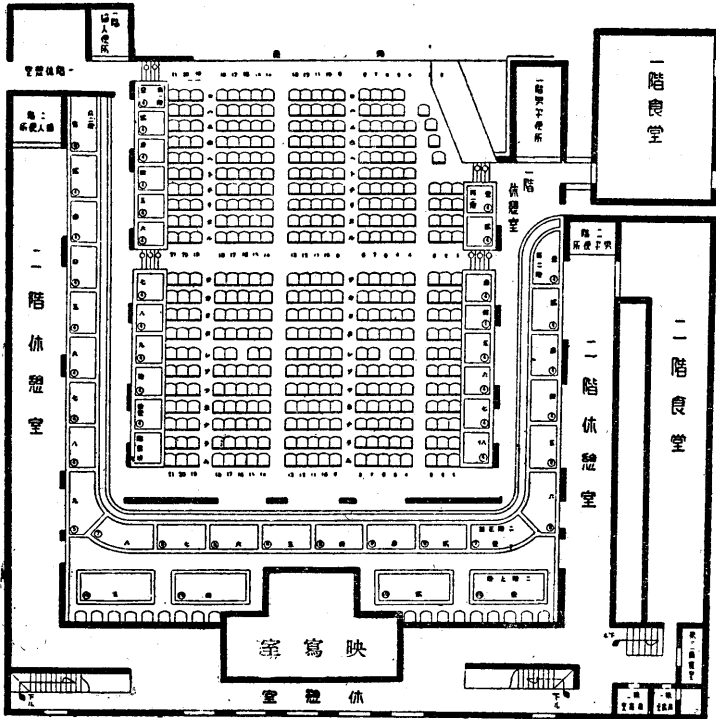
お駒は顔を振りあげて、御見物様、いづれも様、夫を殺す大罪人、さぞ憎いやつ、大膽者徒ら者と、皆様のお憎しみも有うけれど、云ふに云はれぬ譯あつて、夫殺しの科人と、死恥さらす身の因果、不愼と思し一遍の、御回向願ひ上げます、世上の娘御様がたは、此駒を見せしめと、親の赦さぬ徒らなど必らず必らず遊

ばすな、エ、可愛い夫へ義理立てば二親に歎きをかけ、また親々へ従へば、言ひ交はした夫へ立たず、果は斯うした淺間しい、此世からなる劍の山、身を切裂かれ憂恥ぢを、さらすも、定まる因縁づく約束事と諦めても、二世の契りのその人と、一世と限る兩親の、もしや群集のその中に、見えはせぬかと伸び上り、伸び上りても竹垣の、透間がくれの人群れに、目も泣き腫れて見え分かぬ、心を思ひ諸見物、濡れぬ袂は無かりけり。



13

文樂座御場席案内



御・觀・席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前・賣・切・符、壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命のお節お呼出しの電話は

南四七壹壹番で御座ります

切・符・賣・場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります
二・等・席・三・等・席切符は當日正面入口にて發賣致します

觀賞おほえ

昭和十五年十一月 日

源平布引瀧

戀女房染分手綱

お駒才三
戀娘昔八丈

内案居芝の月一十

川湊戸神 場劇竹松 四〇四四川話電	條四都京 座南 五五一一園話電	堀頓道 座角 二一二二南話電	堀頓道 座中 九七二一南話電	阪大 座伎舞歌 六二八二戎話電
日初日一 幕開時四	日初日一卅 半時五・午正 演開回二	日初日一 二部午正晝 半時五夜	日初日一 幕開時四	日初日二 幕開時四
市川猿之助 奮闘興行	松竹家庭劇	十一月 顔見世興行	東京新派大合同 日曜祭日・マチネー開演(一時)	東京大歌舞伎 紀元二千六百年奉祝興行
第一 修禪寺物語 第二 江戶城内慶喜命乞 第三 總攻の秘刀小鍛冶 第四 政大職權三と助十	第一 機密を洩すな 第二 月下氷鏡 第三 戦へる母 第四 節米問答	武限香松道行初音旅 名筆友魂戦大實録先代萩 國性爺合戦大坂町人 濡燕廊稻妻藤娘	第一 續々戀すてふ 第二 難の民辻行 第三 涙の四ツ辻 第四 新編女涙曲師	第一 名和長石切 第二 梶原平三譽 第三 六浦歌の太鼓 第四 十秀の内山松浦大内鑑 第五 芦屋道満大内鑑
一 觀劇料 二 等席 三 等席 四 等席 五 等席	一 觀劇料 二 等席 三 等席 四 等席	一 觀劇料 二 等席 三 等席 四 等席 五 等席	一 觀劇料 二 等席 三 等席 四 等席 五 等席	一 觀劇料 二 等席 三 等席 四 等席 五 等席
(稅別) 四二一、五二八、五〇〇〇〇	(稅別) 二〇〇、一〇七、四〇〇	(稅別) 二二一、一〇五、二八五〇〇〇	(稅別) 四三二、一〇五、〇〇〇	(稅別) 五二一、一〇八、〇〇〇

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場です。

文樂座人形淨瑠璃は 常に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませうやう、皆様の御期待に

背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に

設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雜致しますからお履物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

賣店 は 二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出入口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面

入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを付けて居りますから御用の節は御申付け

下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤

めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上げる事に致しました。御一報次第書上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑩三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十五年十月三十一日印刷

大阪市南區久允衛門町八番地

昭和十五年十一月一日發行 發行所 松竹株式會社大阪支店

大坂市南區久左衛門町八番地

編輯兼 發行所 鳥江 鏡也

大坂市西區土佐堀通一丁目十二番

印刷所 永井日英堂印刷所

一部 金二十錢

文樂座南一食堂

御食の事御用は一幕前に御下命賜
はばれに至極御便利で御座すまい

(御食事時間五時八時まで)

大坂四ツ橋

御宴會にも
御家族連にも

南温泉料理

電話南 75

一	一	一	一	七
三	三	三	三	〇
三	二	三	三	一
四	三	二	一	一
番	番	番	番	番

